

尾崎紅葉・泉鏡花「此ぬし」〔明治23（1890）年〕

紅葉先生 此ぬしの玉稿一卷謹て
拝見いたし候予ては障子紙に御認め趣
あひつたへ候がさはなくて其の如くに
継ぎたるを慥く御つかひありし事
まのあたり相わかり申候さて特に此の
一篇はたゞ六日七日ばかりにて成就
遊ばし候よし承りおよび申す処なり
なにゝつけても襟の正され申候

大正八年六月吉日

鏡花

謹識

まくら あ ばり けふとなり ねえさまき

枕を上げて、老女、今日も隣の姉様来

家

たまひしに、兄様はなせいづもの様にお逢
にいさま やう あひ

ひなさ ■れといへば、俊橘頭を撫で、流石
ぬ しゅんきつかしらな さすがに

いま ことば きのごく 我
に今の言葉は気毒なりし。われもとより

これしきの事を根に持つはあはれぬぞ
いとね はもたぬぞ、

をんな じやする深し。 おい

あの女は邪推ものなりさりながら怒り
子

かへ
て帰りたりとあれば、其儘に棄置け。
そのまゝ すてお

ばちや
いれ
老女茶を煎ぬかといへば、あのお子不敏と
おこびん
娘

おぼ おみまひ をり ひらき ひとくち

覚さば、その見舞の ■折を開き、一口なりと

めしあが ねんぐわんとど たりとて

■召上りたまはゞ、念願届きてどれほど

よろこ し ころろ かた

か喜びたまふか知れず。心に懸けて四折
ての

しな けり およべるを、そのまゝ つみかさ
の品々四折にも及びたるを其儘積重

(掲載箇所 ここまで)

て いまもど る

ね、手をつけて今に戻してくれ ■るなどゝ、
ぐわんい

■ さる頑固はおほせられぬものなり。せめては

是 めしあが うま ひとこと われとり
之なりと召上り、甘しとの一言 ■を我取

つぎ 娘こ きかせまう

次さてあのお子にお聞か申したしと

いへば、馬鹿をいふな されどさほどの志ならば
とくし 篤

く 張かみみ うま

喰ふてやらむ。札紙見て甘かるべきものを

ちよ人だい 禁制
およ人だい 禁制

もつこ 女子大厭忌

持て来よと、磊々落々の大丈夫もの

あしぶみおもひとま
足踏は思ひ止りつれど、俊次の病氣

対あ
しゆんじ びやうき